

鈴木幸夫編

現代英米文學鑑賞辭典

東京堂出版



I06-61
L561.03

鈴木幸夫編

現代英米文学鑑賞辞典

東京堂出版

編者略歴

一九三三年 大阪に生まれる
一九四四年 早稲田大学文学部英文学科卒
現在 早稲田大学文学部名誉教授
著書 「アメリカ現代文学」「現代イギリス文学作家論」「イギリス文学思潮」「アメリカ文学思潮」「文学思潮」「世界文学鑑賞辞典英米編」「現代英米文学の意匠」「ジョイスからジョイスへ」等がある。また翻訳に「シェイクスピア名作集」、V・ウルフ「波」、ボオ代表作選集、マーク・トゥエイン「トム・ソーヤーの冒険」、ロンドン「白い牙」、T・ウルフ「汝再び故郷に帰れず」、ジョイス「フィネガン徹夜祭」等がある。



現代英米文学鑑賞辞典

定価 二八〇〇円

昭和五一年四月二五日 初版発行
昭和五九年一〇月一〇日 三版発行

編者 鈴木 幸夫

発行者 澄田 讓

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 渡辺製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三ノ七 (〒100)
電話東京二三三局三七四三 振替東京千七毛

序文

さきに『世界文学鑑賞辞典 イギリス・アメリカ』（昭和三七年）が刊行されてから、すでに十三か年が経過している。その間、今日の小説家・詩人・劇作家・評論家の数はおびただしく増加し、したがって注目すべき作品のかずかずが、いとまもなく制作されつづけている。

いま一つの作品を理解するには、今日の状況にあつては、現代文学思潮の中で、小説・詩・劇・評論エッセイ等の各ジャンルに通じて世界的な視野に立つことを余儀なくされている。しかし、このことは時間にも容易な業ではなく、少くとも一応の知識を得て、関連作家作品に関する概念が得られる辞典があれ一般読者ばかりでなく、専攻の研究者諸氏にもなんらかの一助になるであらう。

この『現代英米文学鑑賞辞典』はそれを目的として、さきの『世界文学鑑賞辞典』シリーズの主旨に沿って編集された。内容には、さきの『世界文学鑑賞辞典 イギリス・アメリカ』にふくまれている以後の作品を扱い、また同書に止むなく洩れたものをも収集した。

じめ、この辞典は前書の増補のために準備進行していたものであるが、時間の経つにつれて収載すべき目はますます増加し、質量ともに膨大となるに至って、続編として新らしく一書を新生させる必要を感ずるようになった。幸いに東京堂出版の好意あるすすめとはげましを得て、ここに独立した辞典を編集

する機運に恵まれ、はじめから立案計画を建て直して、現在の時点としては、いっそう完璧な現代英米文学鑑賞辞典の完成を志した。小説家七一名・作品八十編、詩人四三名・作品各人数編、劇作家十五名、作品十六編・ミュージカル三編、批評家三一名・作品三二編、総計一五五名、作品二〇〇編ほどを収載している。

本書『現代英米文学鑑賞辞典』の編集に際して、項目の選定・執筆には左記の諸氏がもっぱら事に当たれたが、数度の協議を重ねて快よく編者の意向と指示に協力されたことは感謝のほかはない。

小説 井内雄四郎(早稲田大学教授)

詩 野中涼(早稲田大学教授)

演劇 藤井かよ(早稲田大学講師)

批評 森常治(早稲田大学教授・語学研究所所長)

なお、小説の項は非常に多岐にわたっているので、鈴木幸夫(早大教授)、大辻淑子(早大助教授)、藤井かよ(早大講師)、寺本一雄(早大講師)、紺野耕一(早大助教授)、木村正俊(神奈川県立外語短大講師)、小林富久子(早大助教授)、大島一彦(早大講師)がそれぞれ若干項目を執筆、協力援助してくれた。すべて私の研究室で博士課程を修了した俊秀である。

項目の配列は作者名の五十音順に従い、作者略伝、梗概、鑑賞と分けて解説をほどこしてある。批評・評論書の解説はこの種の辞典に類を見ることのないほど多数の書に及んでいる初めての試みといってよい。本書の構成は、辞典であるために断片的に分散することは当然であるが、これを総合的に統一する方法

として、はじめに、小説、詩、演劇、批評の各ジャンルにわたって、各執筆者による集約的な概説をほどこした。収録項目一覧と索引の収録作品一覧とを利用することによって、現代英米文学の全貌を立体的に把握できるよう配慮したつもりである。

『現代英米文学鑑賞辞典』刊行に当って、東京堂出版編集課長西哲生氏、編集部今泉弘勝、松林孝至、広木理人の諸氏にひとかたならぬお世話にあずかった。とくに索引の作製は編集部をわずらわせた。厚くお礼を申し上げたい。

昭和五十一年四月

鈴木幸夫

凡例

▽本書は、現代のイギリス・アメリカの作家、一五五人をえらび解説し、その代表作に鑑賞をほどこすことを主眼とした。

▽参考作品のうち小説・戯曲の場合は、「梗概」を設け「鑑賞」の一助とした。作品集（詩集・短編小説集・随筆集など）を項目とした場合は、その中の代表的な作品を取りあげて解説・鑑賞をほどこした。

▽項目は各作家を五十音順に配列し、各々に参考作品を上げた。収録作家を検出するときは巻頭の収録項目一覧から、参考作品を検出するときは巻末の作品項目一覧から検出する。

▽作品の邦訳名は、一般に通用している訳名のある場合には、できるかぎりそれを採用した。

▽見出しは作家名（邦訳名）であらわし、以下国籍、原名、生没年、生地、経歴の順に記述した。
▽参考作品は作品名（邦訳名）であらわし、原名、発表年次、作品形態の順にしるし、各々の作家

の項目の中に入れた。

▽引用文は、訳者名を明記した場合、原則として訳文のままにした。詩の引用は、△▽で示した。とくに代表作品を解説・鑑賞するときは、これを別行に示し、△▽はふいた。

▽表記については、当用漢字・現代かなづかいによったが、難読の語など、やむを得ぬものにはルビを付し、読みやすくすることにつとめた。

▽作品名・人名・地名などのカタカナ表記は、原則として、その国の呼びかたによってしるしたが、慣用の固定しているものは、それに従った。ただし、ヂ・ヅ・ヰ・エ・ヲ、はそれぞれ、ジ・ズ・イ・エ・オ、と改めた。

▽作品名・書名・雑誌名・新聞名には、すべて「」をつけた。

▽五十音順配列の順序の細部は、すべて長音・濁音・半濁音を無視して配列した。また促音・拗音および発音をおぎなうためのカタカナ小文字は、一音とした。

▽おもな符号は、次のとおりである。↓（を見よ）
（何年から何年まで） C.（何年ごろ） ?（年代不明）

概

説

現代英米小説

井内雄四郎

アメリカ

一九五〇年代後半のアメリカ文学を最もにぎわせたのは、「ビート・ジェネレーション」の登場であろう。それは明確な主張をもったひとつの文学運動であるよりは、むしろ社会学的現象と呼ぶべきもので、順応主義への反逆と画一化された機械文明における人間の疎外感から生まれ、肥え太った社会から自ら脱落し、貧困に身を置くことによって、自己の人間性を守り抜く姿勢を、その特徴とした。「ビート」とは、「うちのめされた」という意味とも、「至福」beatitude の略語だともいわれるが、この派の代表に、スピード、ジャズ、セックス、麻薬、酒、放浪に陶酔する若者の生態を描いた『路上』（一九五七）のジャック・ケラワック、麻薬の幻想を展開した『裸のランチ』（一九五九）のウィリアム・バローズ、アメリカへの反逆をうたいあげた詩集『吠える』

（一九五九）のアレン・ギンズバーグがいる。しかし、第一次大戦後の「迷える世代」と異なつて、この運動は詩においてはともかくとして、小説においては、あまり成果をあげなかった。「ビート・ジェネレーション」は社会に対する感覚的反逆であるとともに、西部や、インドや、時にはアフリカへの志向という形をとったが、この意味では、北アフリカを背景に、暴力と死の支配する世界につかれたポール・ボールドも、この派と共通する要素をもつ。又第二次大戦後、ジョン・ハースラー、アーウィン・ショール、ジェイムズ・ジョーンズ、J・H・バーンズ、ハーマン・ウオルクらと並んで、戦争小説『裸者と死者』（一九五〇）で文壇に登場したノーマン・メイラーは、五〇年代後半から「ビート派」への共感を示し、『ほく自身のための広告』（一九五九）で、アメリカ社会の画一主義を全否定し、更にベトナム戦争反対の市民運動を唱導するなど、「ビート派」に欠けていた社会的参加の姿勢を強く打ち出した。数々の悲劇的歴史に包まれた南部は、三〇年代にフォークナーという巨大な作家を生み出したが、戦後もカーソン・マッカーラーズ、ユードラ・ウェルティ、キャロライン・ゴードン、キャザリン・アン・ポーター、フラナリー・オカナーなど多くのユニークな作家を輩出させた。とりわけウィリアム・スタイロンは、一九世紀の実際の黒人の反乱に取材した『ナット・ターナーの告白』（一九六七）で、歴史と文学の関連について鋭く問題を

提起し、トルーマン・カポーティは、『草の堅琴』(一九五二)の幻想の世界から、実際の殺人事件を克明に記録した『冷血』(二〇五)の生々しい現実へと飛翔して、『ドキュメンタリー・ノベル』の新分野を開拓し、『クール・クール・LSD交感テスト』(二〇六)のヒッピー作家トム・ウルフをして、『ニュー・ジャーナリズム』の意義を主張させた。

しかし五〇年代後半以降のアメリカ文学でとりわけ実質的な貢献を果たしたのは、黒人とユダヤ系の作家であるといつても過言ではない。黒人文学は、戦前リチャード・ライトの強烈な作家活動によってその存在を認められたが、戦後は、『見えない男』(一九五二)のラルフ・エリソン、『もう一つの国』(一九五三)のジェイムズ・ボールドウィンのめざましい活躍によって、それまでの抗議文学から、黒人の問題を現代の普遍的問題にまで高める芸術的密度の高さを獲得し、W・M・ケリー、セシル・ブラウン、イシュメル・リードと連なる黒人作家に大きな希望と目標を与えている。ユダヤ系作家は、前述のメイラーをはじめとして、ヘミングウェイ、フォークナー二巨星なき後のアメリカ文学の欠落を埋める存在と目される『ハーツォグ』(一九四四)のソール・ペロー、『修理屋』(一九六六)のバーナード・マラマッド以下、フリリップ・ロス、ハーバート・ゴールド、ダニエル・スターン、B・J・フリードマン、スタンリー・エルクイン、ジャージー・コジンスキー、アイザック・シンガ

ー、少し作風は異なるが、アメリカの青年のバイブルとなつた『ライ麦畑でつかまえて』(一九五二)の作者J・D・サルインジャー、亡命ロシア人で『ロリータ』(一九五五)のウラジミール・ナボコフと多士済々である。また生粋の『ニューヨーカー』育ちで、ユダヤ系作家とともにほじめてアメリカの都市の小市民の生活を文学的に定着させたジョン・アブダイクやジョン・チーヴァの才筆も見落とせない。その他、『道の果て』(一九五七)のジョン・バース、『第二の皮膚』(一九六三)のジョン・ホークス、『キャッチ22』(一九六二)のジョーゼフ・ヘラー、『屠殺場五号』(一九六六)のカート・ヴォネガット・ジュニア、『郭公の巢』(一九六三)のケン・キージー、『V』(一九六三)のトマス・ピンチョン、『都市の生活』(一九七〇)のドナルド・バーセルミール、『水瓜の糖で』(一九六六)のリチャード・ブロディガン、『死の装具』(一九六七)のスーザン・ソンタグをはじめとして、ジェイムズ・バーディ、テリー・ザン、トマス・バーガー、J・P・ドンレヴィ、ロバート・クローヴァ、ロナルド・スキニック、ルドルフ・ヴァリッツァ、チャールズ・ニューマンなどが、幻想的手法によって、実験的手法によって、不条理な、あるいはブラック・ユーモアの世界を多彩に描き続けている。しかし、『彼ら』(一九六六)の才女ジョイス・キャロル・オーツのように、リアリズムの可能性を信じる若い作家もいることはいうまでもない。

イギリス

アメリカの「ビート・ジェネレーション」と同様、一九五〇年代後半のイギリス文学で最も大きな波紋を呼んだのは、いわゆる「怒れる若者たち」の出現であった。ジョン・オズボーンの戯曲『怒りをこめてふり返れ』（一九五〇）にその名が由来するこのグループは、福祉国家イギリスの微温的な現実には焦り、苛立ち、不満をもつ若者の感覚的反抗という面では、先程のアメリカの「ビート・ジェネレーション」やフランスの「ヌーベル・バーク」と共通性をもっていた。『急いで下りろ』（一九五三）のジョン・ウェイン、『ラッキーク・ジム』（一九五五）のキングズリー・エイミス、『草は歌っている』（一九五七）のドリス・レスリング、『年上の女』（一九五七）のジョン・ブレイン、『アウトサイダー』（一九五八）をはじめとする多くの評論や小説で、新実存主義を唱えるコリン・ウィルソン、『土曜の夜と日曜の朝』（一九五九）でデビューした労働者階級出身のアラン・シリトーらの名があげられる。『網のなか』（一九五五）でスタートしたマードックは、作中に示された反抗的な気分から、一時「怒れる若者たち」のひとりに数えられたが、その後独自の実存主義的な作品を発展させ、この派の作家のほとんどが怒りを失ってしだいに創作力にも衰えを見せているなかで、シリトーと並んで最も充実した作家活動を行っている。マードックといえは、

イギリス独自の女流作家の長い伝統は、最近も、ミュリエル・スパーク、エドナ・オブライエン、ブリジット・ブローフィ、新進気鋭のマーガレット・ドラブル、その姉のA・S・バイヤットをはじめとして、戦前から書いているローズ・マコリー、ロザモンド・レーマン、エリザベス・ボーエン、コンプトン・バーネット、オリヴィア・マニング、C・P・スノー夫人、パミラ・H・ジョンソン、モニカ・ディケンズ、ペネロピー・モートイマー、ナンシー・ミットフォードなど壮観である。ハクスリー、オーウェル、イヴリン・ウォーと連なる社会風刺の伝統は、一貫してイギリス中流階級の偽善を痛撃してやまない『アングロ・サクソンの姿勢』（一九五〇）のアンガス・ウィルソンに最もよく受け継がれ、リアリスチックな手法で社会を写してゆく点では、大河小説『時間の音楽』のアントニー・ポウエル、『他人と同胞』のC・P・スノー、ジョイス・ケアリーが代表的存在である。筋の運びを中心とした物語では、『落にて』（一九五三）のネヴィル・シュート、『スペイン気質』（一九五四）のV・S・プリチエット、『ブランディングズのギャラハッド』（一九五五）のウッドハウス。チェーホフを思わせる短編の名手H・E・ベイツ、『夜明け前におぼろに見える』（一九五七）のナイジェル・ボールチン、海の文学のジェイムズ・ハンリー、ニコラス・モンサラット、C・S・フォリスターがおり、形而上的なスリラーでは、つい最近も『名誉領事』（一九

三』を発表して、息の長いところを示した老大家グレアム・グリーンや、『獵人待ち伏せて』（一九五三）のF・L・グリーンがいる。詩人として名声のあるロレンス・ダレルはブルーストの『失われた時を求めて』を思わせる大作『アレキサンドリア四重奏』（一九五七―一九五八）のなかで、華麗な詩的イメージをちりばめて、現代における愛の不毛を追求して、モラルとリアリズムに縛られがちなイギリス小説界において一躍作家として名声をはせ、ウイリアム・ゴールディングは、『蠅の王』（一九五五）、『継承者たち』（一九五七）と、アレゴリカルな構図によって人間の悪を描き続けている。神話的なものへの志向はダレルにも見られたが、『魔術師』（一九五八）のジョン・ファウルズ、『ゴッグ』（一九五七）のアンドルー・シンクレアは、夢とも幻ともつかぬ奇怪な雰囲気にして、神話への志向を更に濃厚に打ち出している。一般に戦後のイギリス小説は、ジョイスの徹底的破壊の反動もあってか、プロットや物語性への回帰が目立ち、方法の実験への意欲に乏しいが、そのなかにあつて、『海辺の庭』（一九五三）のフィリップ・トインビー、『時計じかけのオレンジ』（一九五八）のアントニー・バージェス、『トロール』（一九五八）のブライアント・ジョンソンらの実験が注目値する。その他、『バラと革命』（一九五七）のP・H・ニュービー、『バラの花壇』（一九五八）のウイリアム・サンソム、『一六勝負』（一九五八）のトマス・ハインド、『太陽の医者』（一九六〇）のロバート・

ショー、『快楽の園の最後のもの』（一九五五）のフランシス・キング、『若いひとびと』（一九五八）のウイリアム・クーパー、『身分証明書』（一九五七）のナイジェル・デニスらの名も、一応あげておくべきだろう。こうして見てくると、全般的に最近のイギリス小説は、『偉大な伝統』の重荷を担いかねてか低調であり、活発で意欲的で、様々な可能性に満ちたアメリカ小説と比べると、伝統の美学と、独創的前衛の信念との谷間が見える。フランスの批評家クロード・エドモンド・マニエの著書『アメリカ小説の時代』という表題が、説得力豊かに訴えかけてくるところがある。

現代英米詩

野中 涼

イギリス

イギリスの現代詩は、大体、ウイリアム・バトラー・イエイツから始まる、という風に考えられている。このアイランド詩人ははじめ、ブレイクやシェリーの影響を受け、

ラファエロ前派の感覺性に満ちた恋愛詩を書いてゐた。それからアイルランド伝統のたそがれの世界に對する強い愛がこれを描き、異教的な呪術にも興味をいだいた。更にアイルランド獨立運動の指導者のひとりだった美しい女性に寄せる烈しい戀情を通して、現実の世界、政治の世界に眼を開かれ、国家と英雄を思ふリアリスティックでモラリスティックな詩を書くようになる。そういうロマンティックな精神をもつて彼の作品は次ぎつぎに思想的に変化した。象徴性の強い後期の作品では、同時代の他の詩人たちに比べて、はるかにテーマが現代的になり、文体が複雑で、はるかに強烈な影響力をもつようになった。

同時代の他の詩人たちというのは、いわゆる「ジョージ朝詩人」と呼ばれた人たちである。メイスフィールドや、ドゥ・ラ・メア、エドワード・トマス、アンドルー・ヤング、それにハウスマンやブリッジズも加えていいだろう。彼らも變化に満ちた詩を書いてゐたが、大ざつばにいつて、技法的にはごく穏やかな展開を見せただけだし、時には地味でパセィックな田園詩に戻つていたりした。ただ、この一九一〇年代には、第一次大戦に参加した人たちのうちに優れた「戦争詩人」が現れて、しばらく強い共感をもつて讀まれた。若く戦死したルーパート・ブルックやウイルフレッド・オウエン、ジェイムズ・フレッカーをはじめとして、ブランドン、グレイヴズ、サスーン、ハトバート・

リード、リチャード・オールディントンなどが、勝利と榮光のシンボルどころか、無益な死に直面した無益な人殺しとしての戦争の悲惨なイメージを語つた。

そして一九二二年、トマス・スターンズ・エリオットが四三三行の長編詩『荒地』を「クライティアリオン」誌に、二回に分けて發表した。「石地だらけで、水がない」という現代文明の不毛な状況をどうして救済することができるか、という大きな主題を、率直に大胆に捕らえて、古典の表現のパロディをちりばめ、逆説に逆説を重ね、意識の流れの文体をうまく利用して、詩壇に途方もないショックを与えた。アメリカからイギリスに来てやがて歸化したこの博識で明敏で感じやすい詩人にとつて、現実の断片的なイメージの山にすぎないというベシミズム、ヨーロッパ文明の没落というシュペングラールのな歴史感覺が、はじめから、どうにかして克服しなければならぬ問題として意識されていた。その問題を鮮明なイメージをもつて、しかもイメージであるとともに過去の伝統的な意味をすべて包摂する深遠なシンボルをもつて完全に表現するには、確かに彼の採用したような徹底的な詩法の実験が必要だった。彼はアングリカン・チャーチの信者になり、古典主義者を自称して、一種の伝統主義のうちに救いを求めるようになったが、『四つの四重奏』はキリスト教信仰における内的ドラマの様相をイメージ化してみせ、その結果は稀有なすばらしい詩

的成就として評価されている。もちろん彼は突然に表現のそういう変革を達成した訳ではなかった。トマス・ヒュームから「明確なイメージのことば」で詩を書くべきだという主張を聞いたエズラ・パウンドが、その主張の実践を目指す「イマジズム」の運動を興していた。オールディントンやフリント、ロレンス、それにアメリカの詩人たちが彼の雑誌に寄稿して、表現方法の反ロマンティシズムの変革に努めていた。エリオットは、パウンドの弟分のようにして、その活発な革新的風土の中から出てきたのである。

一九三〇年代になると、ヨーロッパの経済不況が広まり、スペイン内乱が起こり、ファシズムの傾向が強まってきた。「ニュー・カントリ派」と呼ばれたオーデン、スペンダー、デイ・ルイス、マックニースたちは、一時コミュニストになったことがあり、フロイトやユングの心理学を学び、スペイン内乱に参加して、反ファシズムの政治的な詩や心理学的な抑圧機構批判の詩を書いた。マイケル・ロバーツ、ジョン・レーマン、エンブスンもこの派に属すと考えられる。そして一九四〇年代に現れてきた詩人にはデイヴィッド・ギヤスコインやジョージ・バーカー、エドウィン・ミューア、ベッチェマンがいるが、特にウェールズ詩人ディラン・トマスは、無数のイメージの乱舞を引き起こすように単語を組み合わせる奇妙な文体の実験によって、奇妙に錯綜した内面的抒情の世界を作り出した。「ニュー・アボカリ

プス派」といわれるヘンリー・トリリス、フレイザー、第二次大戦後の「戦後派」であるヴァーノン・ウォトキンズ、バーカー、ジョン・ヒーススタブズ、パトリシア・ピアなども優れた詩を書いている。スコットランド詩人ヒュー・マクディアーミッドは、政治的でもありモラリスティックでもあり、詩の良心の声として、若い詩人たちに尊敬されている。

一九五〇年代になると、モダニズムと国際性を避けようとする「ムーヴメント派」が出てきて、フランスよりもアメリカの現代詩の影響を強く受けるようになる。ラーキンやエンライト、エイミス、エリザベス・ジェニングズ、ドナルド・デイヴィー、それからアンソニー・スウェイト、アラン・ブラウンジョンという人たちである。フィリップ・ホプスボームを中心とする「グループ派」は、別に支配的な傾向はない。ただ、ビーター・ポーター、ビーター・レッドグロヴ、ジョージ・マクベス、エイドリアン・ミッチェルという詩人たちは、風刺的だったり実験的だったりするが、パウンドやエリオットに反対してロレンスやオウエンの明快で素直な文体に戻ろうとした。しかし、この年代に最も優れた詩を書いたのは「表現派」のテッド・ヒューズとシルヴィア・プラースという夫婦の詩人だった。他に「新しい声」としてシーマス・ヒーニー、エイドリアン・ヘンリー、ブライアン・パテン、ハリー・ゲストなどがある。

アメリカ

アメリカの現代詩については、ホイットマンとディキンソンの後、しばらく優れた詩人が現れなかった。ほぼ四〇年のギャップの後、一九一〇年代に、「シカゴ派」のエドガー・リー・マスターズとカール・サンドバーグ、ヴェイチエル・リンゼーという伊利ノイ州生まれの三人が現れて、アメリカ現代詩が始まった、と考えられている。弁護士のマスターズは、死者たちの墓碑銘ともいべき告白の詩集を書き、生前の願望や秘密や罪をあらいざらい打ち明けるというフランス自然主義とアメリカ・ジャーナリズムの暴露主義に基づく表現でその詩集をベストセラーにした。新聞記者のサンドバーグは散文のリズムと民謡のリズムとをうまく利用して、産業の活発な混沌とした荒々しい都会をリアリスティックに描いた。リンゼーは伝承歌謡やジャズに賛美歌のリズムも混ぜ合わせて吟唱詩の伝統を復活させ、朗読して歩いて非常に有名になった。彼らはみな「自由詩」を採用し、そこにアメリカ英語特有の国語スタイルを生かそうとしていた点、口語自由詩の先駆者エドウィン・アーリントン・ロビンソンの後継者たちだったといえる。

シカゴは当時、興りつつあった文学的ルネッサンスの中心地であった。ハリエット・モンロー女史が一九一二年に有名な詩専門の月刊誌「ポエトリー」を創刊して、意欲的

な前衛性をもつ作品をどんどん掲載し始めた。エズラ・パウンドが新しい詩人の発見役、紹介役を務めた。天才を見つける天才といわれたこの詩人は、「イマジズム」を主張するとともに、その主張にこたえる詩を敏感にかぎわけ、実に多くの優れた無名の詩人を発掘して作品をモンロー女史へ送った。オールディントンやエリオットやジョイス、ロレンス、タゴールなどに続いて、「ポエトリー」誌はヒルダ・ドゥリトルやジョン・ゴールド・フレッツチャー、エイミー・ロウエル、マスターズ、サンドバーグ、リンゼー、そのほか後に有名になる多くの詩人の作品を載せた。例えばサンドバーグは「シカゴ」を、リンゼーは「大将ウィリアム・ブース天国に入る」をこの雑誌に発表するとともに、はじめて才能を評価されるようになった。

「イマジズム」の運動は、パウンドがやがてヴォーティンズムを主張して離れていったあと、エイミー・ロウエルが引きついで熱心に推し進めた。大体一九〇九年から八年間くらいの、ごく短い期間だったし、実際それほど傑作を生み出した訳ではなかったが、その主張の影響は絶大なもので、それ以後の詩人たちで、宣言文であるいわゆる「イマジスト・クレド」の洗礼を受けなかった者はないだろう。日常語を使うこと、しかし正確な言葉を使い、固く明確な詩を書くこと、いいかげんな語はいっさい使ってはならない。新しい韻律は新しい思想を意味するのであり、いかな

る題材も自由に選びながら、常に新しいリズムを創造しなければならぬ。画家ではないけれども、ものを一つ一つ正確に描き、鮮明なイメージを提供しなければならぬ。これが彼らの詩集の序文としてオールディントンが書き、ロウエルが手を加えて発表した主張であつた。

イメージを強調するところは非常にアメリカ的な特徴のひとつである。恐らくイメージによる認識、イメージによる表現、イメージによる思考という才能を十分に認める点がある。あるいは一九二〇年代にかなり多くの女流詩人の現れた理由を説明することになるのかもしれない。ロウエルやドワリトルのほかに、サラ・テイズデル、エリナー・ワイリー、エドナ・セン・ヴィンセント・ミレー、ミュリエル・ルーカイザー、レオニー・アダムズ、エリザベス・ビショップ、それから精細な観察と知的なおしゃべりの大家マリアン・ムア。彼女らはモダニズムの奇抜な実験や、不幸な現実観の思想的変種によって歪められることのない作品、自分のイマジスティックな発想と口語のリズムに基づく確実な落ち着きをもった素直な作品を書いた。それは同じ年代のカミングズやハート・クレイン、マクリーシュという詩人たちが、フランスのダダイズム、シュールレアリスム、サンボリスムを学び、エリオットの引用とアルージュンの多い詩法に影響されて、それぞれ文体の習慣を破って独自の世界を作り出しているのと対照的であつた。

南部のヴァンダビルト大学を中心に活動していた「フュージティヴ・グループ」の詩人たちも、女流詩人たちとは又違った意味で、非常に伝統的な定形詩に戻ろうとする傾向を示した。ジョン・クロー・ランサムやアレン・テイトを中心にして、ドナルド・デイヴィッドソン、ロバート・ペン・ウォーレン、メリル・ムアなどで、ほとんどが大学教授であることや「ニュー・クリティシズム」の拠点にいた詩人たちであることもその傾向と無関係ではなさそうである。このディキンソンとポオを結合したようなアカデミズムは、一九五〇年代にビート詩人が出てくるまで、アメリカ全体の支配的傾向であつた。

それに対して、三人の優れた詩人がいた。一九二〇年代から活躍している人たちが、例えばニュージャージー州の医者だつたウィリアム・カロス・ウィリアムズは、イマジズムの影響から出発してしだいにアメリカの最もアメリカらしいものを記録したいという欲求に発展し、アメリカ英語の独自の表現を開発することに努力した。エリオットのアルージュンの詩法については、それが後ろ向きであることを指摘し、そのためにアメリカ前衛詩は二〇年間遅らされた、といつて憤慨した。代表作『パタスン』は彼が育った田舎町の歴史的な、精神的な、風物誌的な観察と調査の膨大な記録という方法をとつて書かれている。そして災害保険会社の副社長だつたウォリス・スティーヴンズは

フランス・サンボリスムの影響を完全に消化した。そして人並みはずれたこまやかな言語感覚をもち、認識された現実とイマジネーションとの関係を抽象的な、複雑な、精巧な言葉のモザイク模様のなかに表現して、ほとんどそれを絶対詩と呼ばれるようなものに近づけていった。「詩人の詩人」といわれた。また、ニューハンプシャーの農場で百姓をしていたロバート・フロストは、地味な調子で田園生活を描きながら、人生の知恵を語るモラリストであり、巧みに現実と幻想を折り混ざる技巧家でもあることを示した。清教徒的なニューイングランドの伝統を生きた国民詩人として尊敬されている。田園に詩の素材を求めた点で、ロビンソン・ジェファーズやレトキー・エバハートなどの代表者といってもいい。

そして一九四〇年代には、第二次大戦とその精神的な傷を描く詩人たちが現れた。ランドール・ジャレルやカール・シャピロ、ケニス・パッチェン、デルモア・シュウォーツ、ピーター・ヴィーレック、ウィンフィールド・スコット、ロバート・ロウエルという人たち。彼らの主題は多かれ少なかれ社会的であり政治的であることを避けることができなかった。現代で最も優れたアメリカ詩人といわれているロウエルは、特に、良心的な参戦拒否者として投獄されたり、ピューリタンからカトリックに改宗したり、ノイローゼで精神病院に入院したりした経歴をもち、その表現は現

代のあらゆる深刻な問題を一身に背負ったような、しかも技法の完璧な詩となっている。

一九五〇年代以後は、チャールズ・オルスンを中心とする「ブラック・マウンテン派」のロバート・ダンカン、デニズ・レヴァトフ、ロバート・クリーリー、ジョン・サンのウィリアムズなどが、かなり実験的な詩を書いている。呼吸のリズムを文字に表そうとする「投射詩」の方法をオルスは主張していた。「サンフランシスコ派」はローレンス・ファースティングやロビン・ブレイザー、フィリップ・ラマンシアなどがいるが、これはアレン・ギンズバークを中心にする「ビート派」にも属しているだろう。一切のアカデミズムに対立するホイットマン風の「ビート詩人」はたくさんいるが、グレゴリー・コーノ、リロイ・ジョーンズ、ゲイリー・スナイダー、フィリップ・ホイレンが代表的である。「ニューヨーク派」と呼ばれているのはバーバラ・ゲスト、ケニス・コッホ、ジョン・アッシュベリ、フランク・オハラなど。また別に独自の立場で書いてきたケニス・フィアリングやケニス・レックスロスもいる。それからルーイス・シンプスンやドナルド・ジャステイス、スノッドグラウス、ジェイムズ・ライト、ロバート・ブライは皆大学で教えている。深い主観性とともに広い普遍性をもつイマジネーションの表現を開発しているが、古典的な形式にホイットマン的な思想を盛り込もうとしている詩人たちである。